

資料紹介

権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	ラテンアメリカレポート
巻	19
号	2
ページ	70-72
発行年	2002-11-20
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00006150

前山 隆著『風狂の記者——ブラジルの新聞人
三浦鑿の生涯——』御茶の水書房 2002年 448
ページ

本書は、長年にわたりブラジルの日系社会について文化人類学的アプローチから研究を行なっている前山隆氏が、三浦鑿という一個人のライフ・ヒストリーを通して、第2次大戦終結前までのブラジル日系人の精神史について考察を行なった書である。前山氏は今までにも中尾熊喜、渡辺マルガリータという個人のライフ・ヒストリーを辿ることにより、ブラジル日系社会の変容を明らかにしてきたが、本書は同様の手法を用いた3作目の作品である。

三浦鑿はブラジルの邦字新聞『日伯新聞』の社主として活躍し、戦前の日系社会の世論形成に多大な影響を与えた人物である。本書は三浦の日本での生い立ちを描いた第一部と、ブラジルでの新聞人としての生涯を描いた第二部とに分かれ、終章も含めると全部で16の章で構成されている。三浦がすでに故人であり、彼に関する現存資料が非常に限られていることから、前山氏が執筆を着想してから20年以上を経て、ようやく本書が発行されることとなった。

戦前の多くのブラジル日系人は、日本とブラジルという二つの国家権力の間で翻弄されながら、出稼ぎ移民として自らの人生を模索していた。そのような状況下、三浦は反国家権力的態度を前面に出し、独自の移民論を主張し、当時のブラジル日系社会において激しい論争を巻き起こした。「三浦を抜きにブラジル日系人の精神史は片手落ちである」と前山氏が述べる三浦鑿の言動について詳細な分析を試みた本書は、戦前のブラジル日系社会のあり様を知る上で大変貴重な一書であるといえる。

(近田亮平)

遠藤泰生・木村秀雄編『クレオールのかたち——
カリブ地域文化研究——』東京大学出版会 2002
年——316ページ

本書は、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻の研究者たちを中心とする共同研究の成果である。序論で、クレオールの多義性が説明された後、クレオールに関わる論点へ、さまざまな角度からの接近が行なわれている。第1論文は、ジャマイカの国民国家に同化しようとしなかった逃亡奴隷の歴史、第2論文は、プエルトリコの1998年住民投票を扱う。第3論文は、植民地時代ボリビアにおけるイエズス会教会による先住民意識の新たな形成、第4論文は、ペルーの国民的文化におけるアフリカ系文化の影響、第5論文は、サルバドル、マナグア市など九つのラテンアメリカ都市の景観におけるクレオール文化とミドルクラスの混淆、へと議論を広げる。さらに、第6論文は、カリブの人食い人種言説、第7論文は、クレオール概念についての思想史的考察、第8、9、10論文は、クレオールの文学作品を解説し、その社会的意義を論ずる。全体を通じて、読者は、カリブ地域の文化的事実に関する情報としてよりも、現代思想としてのクレオール理解に導かれる。

(米村明夫)

加藤 薫著『21世紀のアメリカ美術——チカー
ノ・アート 抹消された〈魂〉の復活——』明石
書店 2002年 454ページ

本書は、ラテンアメリカ美術、とくにメキシコの壁画美術とその社会的意味について研究を重ねてきた著者が、「もうひとつのラテンアメリカ美術」である、米国内のチカーノ・アートへとその視点を広げたものである。チカーノ・アートを追いかけて10年以上というだけあり、豊富な資料やアーティストとの交流に裏打ちされた本書は、写真によるアート

紹介も数多く、日本では馴染みのないチカーノ・アートの世界へと読者を引き込んでいく。

チカーノ・アートの発展は単なる文化史にとどまらない。米国とメキシコのはざまで彼らがいかに自らのアイデンティティーを確立し、それを表現し、それを仲間と共有していくかというプロセスであり、またアングロ支配の米国において、抑圧と従属の歴史からいかに自分たちの権利を獲得していくかという、抵抗から闘争への運動の軌跡でもある。

巻末には150ページを超えるチカーノ・アートに関するアーティスト・データ、用語解説、関連年表が掲載されていて、資料としても充実している。

(坂口安紀)

国本伊代著『メキシコの歴史』新評論 2002年 402ページ

メキシコを訪れた人の多くは、街にあふれる混沌とした熱気、メスチーソ、先住民、白人などさまざまな顔をもつ人々が交錯して生きる姿、植民地時代のコロニアルな街並みと近代的なオフィス街のコントラストや国内に点在する古代文明遺跡など、この国の持つ複雑な顔と強烈なインパクトに驚き、魅了される。

本書はメキシコ史の専門家として30年間研究者の道を歩んできた著者が、一般読者のために書き下ろしたメキシコ通史である。

研究で裏づけられた豊富な知識を背景に、古代から20世紀末までという長い歴史過程がわかりやすく説明されており、複雑な顔を持つメキシコがどのような成り立ちを持つ国なのかを理解するための格好の書となっている。

また全てのページに効果的に配された写真や図表が、著者が語るメキシコ史をさらに活き活きと説得力を持ったものになっている。メキシコを代表する画

家ディエゴ・リベラの歴史絵巻の一部など歴史的事件を象徴的に描いた絵画が豊富に使われているのが興味深い。

巻末には年表やメキシコについてさらに詳しく知りたい読者のための学術論文を含む参考文献一覧、メキシコと日本の交流関係を推進する団体・機関・奨学金制度を紹介した資料などが付されており、メキシコやラテンアメリカについてこれから勉強しようという人の必読書となっている。(村井友子)

西島章次・Eduardo K. Tonooka著『90年代ブラジルのマクロ経済の研究』神戸大学経済経営研究所 2002年 232ページ

1990年代ブラジルにおいて、なぜ年率2864%というハイパー・インフレが発生したのか、レアル・プランはなぜ有効であったのか、また、経済は比較的安定していたにもかかわらず97年の通貨危機はなぜ発生したのか。ダイナミックなブラジルのマクロ経済を理解するのは容易ではないが、本書は最先端のマクロ経済学の理論を用いて、これらの問題に対し、フォーマルなアプローチの方法と明解な答えを示唆してくれている。

著者の一人の西島章次氏は、ここで紹介するまでもなく日本におけるラテンアメリカのマクロ経済研究の第一人者であるが、本書は同氏がサンパウロ・オズワルド・クルス大学教授であるTonooka氏と神戸大学経済経営研究所において発表してきた1990年代のブラジルのマクロ経済に関する単著・共著の学術論文を集めたものである。マクロ経済の現状分析にはじまり、経済モデルを用いてブラジルに特有の問題を解説し、さらには、金融・財政の構造的な側面も分析対象として政策を議論している。

一般的な経済モデルを、データを変えるだけで途上国に応用しようとするエコノミストが多いなかで、

資料紹介

両氏のように、途上国経済の構造をフォーマルな形でモデルに組み込み、そこから導かれた含意から政策論を繰り広げる姿勢は、地域研究を志す者にとっても参考になる。終章では政治経済にまで踏み込んだ議論を行なっているが、ブラジル大統領選挙を控えて今後の経済政策が注目されるなか、本書はまさに研究者の「見る眼」を提供している。（北野浩一）

星野妙子編『発展途上国の企業とグローバリゼーション』アジア経済研究所 2002年 v + 339ページ

本書は平成12・13年度にアジア経済研究所で実施した、グローバリゼーションが発展途上国企業にどのような影響を与え、各企業はどのような変容を遂げたかという課題を解明するための研究会の成果である。対象国は、ラテンアメリカとアジアのメキシコ、ベネズエラ、ブラジル、チリ、韓国、中国、台湾の7カ国・地域をとり上げ、いずれも各国を代表する有力地場企業の事例を対象に分析を行なっている。

序論では、発展途上国企業は先進国企業と比べて、能力的比較劣位、ファミリー企業など現地の政治・社会・経済環境に由来する特質、発展途上国をホームベースとするプラス・マイナス含めたホームベース効果がある点が指摘されている。その上で、発展途上国企業が生き残る五つの条件を指摘している。すなわち、技術の標準化・公開が進んだ業種で、新市場の開拓に努力し、ホームベースに競争優位を生む条件があり、財務問題がなく、経営資源を集中した企業である。本書は主として成功事例を扱ったという限界はあるが、グローバリゼーションのもとで発展途上国企業がどのような生存・発展戦略を採ったかを知る上で、重要な事例研究の集積であるといえる。（宇佐見耕一）

アンジェロ・イシ著『ブラジルを知るための55章』明石書店 2001年 265ページ

本書は、日本で主にジャーナリストや研究者として活躍する日系ブラジル人アンジェロ・イシ氏が、日本からは地理的に最も遠く、サンバやサッカーなど以外ではあまり知られていないブラジルの本当の姿を日本人に知ってもらうことを目的に執筆した書である。イシ氏は本書の中でブラジルのさまざまな魅力とともにその問題も紹介し、日本人の「ブラジル・フリーク」を増やすべく、「ブラジルからのラブ・コール」を送っている。

本書はタイトルどおり、ブラジルのさまざまなエピソードを扱った55の章から構成され、それらは基礎・初級・中級・上級編の四つに分けられている。多くの写真が掲載され、お勧めの文献やインターネットのホームページが紹介されており、本書をもとにブラジルに関するより詳細な情報へのアクセスが可能となっている。したがって、本書を読み進んでいけばいくほど、「ブラジル講座」を受講しているかのように、遠かったはずのブラジルを身近な存在として捉えることができるようになる。

ブラジルには興味があるが専門的な学術書はちょっとという人にとっては入門書として、また、ブラジルについての知識は多少あるがもっと知りたい、または疑問に思うことがあるという人にとってはブラジル・フリークになるための書として、肩の力を抜きながらも、ブラジルという国とその社会、そしてそこに住む人々を深く知ることができる必読の本である。（近田亮平）